

佐藤喜代治博士
追悼論集刊行会
編

日本語学の蓄積と展望

明治書院

目次

刊行のことば

日本語会話文典……………森岡健二……………一
対義語についての短い報告……………柴田武……………三
國語史上における眞興の位置……………築島裕……………五

日本語の動態

旧満州に残存する日本語——ある朝鮮族女性の談話……………真田信治……………六
移住と方言の受容——愛知県豊田市の生え抜きと転入者を対比して……………下野雅昭……………八
国語資料としての『翁問答』……………石井みち江……………一〇
『改訂 増補 哲學字彙』の版種……………飛田良文……………一三

音韻の諸相

合拗音クワ残存地帯における知識層高年の保持様態と価値観

——新潟県小千谷市を中心として——

加藤 正信……………一五

アクセント調査における「読ませる調査」と「言わせる調査」

——山形県三川町における小調査から——

佐藤 亮……………一七

感動詞の音調表記法について

——三線記譜法のすすめ△ああ△を例として△——

浅田 秀子……………一七

文法研究の蓄積と展開

寛政版『和歌吳竹集』「てには大概」と『てには綱引綱』

——尾崎雅嘉のテニヲハ論——

佐藤 宣男……………二四

松下文法の活用論——文法論に原辭論は不要か——

斎藤 倫明……………二五

文の論理と体言文……………

石神 照雄……………二五

名詞文についての覚え書……………

仁田 義雄……………二七

ディオオンティック・モダリティをめぐる

——言語行動の観点からの「しなければならぬ」の事例分析——……………小矢野 哲夫……………三〇

文法史の展開

語り手が顕在化した地の文——『源氏物語』と中世王朝物語……………小松 正……………三三

狂言「三人の長者」の諸台本に見る名ノリの指定表現の考察……………蜂谷清人……………三五

口語サ変動詞の助動詞「まい」への接続の実態解明……………平林文雄……………三六

中国地方における意志・推量形式の方言史

——GAJと「田植草紙」との比較から……………彦坂佳宣……………四〇

語彙史の視点

語源研究における漢語……………前田富祺……………四六

古代歌語源流考——「青」を中心に……………佐藤武義……………四七

上代の食物語彙——『風土記』を中心に……………佐藤 亨……………四八

平安時代の公家日記のことばの文章史的性格

——「兼日」の語構造をめぐって……………遠藤好英……………五〇

広本節用集の典拠資料——田積・郡名表示を中心に……………菊田紀郎……………五三

「背負う・担ぐ」語彙と『雑兵物語』の語彙の多元性・重層性

——先行研究の再検討……………安部清哉……………五五

「背負う・担ぐ」語彙と『雑兵物語』の語彙

の多元性・重層性——先行研究の再検討——

安部清哉

一 はじめに

江戸初期成立の『雑兵物語』（以下『雑兵』とする）は、近世初期の東国下層階級の言語状況を知ることのできる数少ない東国語資料として、その価値が検討されてきている（『雑兵』の先行研究は参考文献参照）。基本的に、東国の口語を色濃く投影するという評価が「定説」である研究状況であるが、一方、その中に混在する西日本方言に関しては必ずしも明確な位置付けがなく、それは、関東「べい」の過剰なまでの使用の解釈とも関連している課題でもある。ところで、この『雑兵』には、「背負う・担ぐ」語彙が少なからず使用されている。

所謂「背負う・担ぐ」語彙（表現）というのは、動詞「背負う・負う・しよう・おぶう・おんぶする」など、背中に人や物を載せることを表す語彙（以下先行研究に倣い「背負う」語彙とする）と、動詞「担ぐ・担う・肩ぐ・肩げる・かづく」など、背中や肩を支点にして（直接に、また、道具を媒介にして）物を載せることを表す語彙（以下同様に「担ぐ」語彙）とを、総称して呼んでいるものである。（以下、両語彙を総称して便宜的に「背負う・担ぐ」語彙とす。文献例

を扱う時はセオフ・オフ・オプフと歴史的仮名遣で表す。

この語彙は、国立国語研究所『日本言語地図』(以下、T&T)と略記)に合計七地図あること(注1)から、東西で異なる語彙体系が注目されるようになったものである。また、語彙体系上の史的变化もあって語彙史研究でも研究の進んでいる語彙でもある(参考文献及び補注1参照)。そのように、文献国語史・方言国語史両面の問題を孕みながら、かなりの成果を挙げてきているものの、先行研究を精査していくと未解明の部分を残している。(補注2)

さて、興味深いことに、『雑兵』にはこの語彙の東西両語形が混在する。しかし、その詳細な分析となると、後述のように必ずしも十分でないことが指摘できる。東国資料としての一面的用例利用に終始し、東西の語形相互の意味を比較考察し用例数も考慮に入れて全体の体系を検討するという作業が欠落しているのである。

「背負う・担ぐ」語彙の残された課題を明らかにすることは、語彙史研究にとっても重要であり、一方、『雑兵』の用例を正しく解釈することは、近世初期の同語彙の状況を明らかにする点でも、また、『雑兵』の資料的評価の点でも重要な意味を持つ。これらの作業は、方言国語史上も文献国語史上も興味深い問題を提示するテーマと思われる。

以上のような問題意識に立ち、本研究では、当該語彙史の課題を明らかにして『雑兵』の同語彙の史的・地域的位置を再検討することを目的とする。なお、本稿では紙幅の関係で、主に当該語彙及び『雑兵』の同語彙に関する先行研究の再検討と、新たな古例(カック)の指摘までを扱うこととする。

二 先行研究の問題点と看過されている視点

この章では、先行研究で指摘されてきた重要な点と解釈上の問題点を確認していききたい。先行研究として『日本語の歴史4』(一九六四)、金田弘(一九七二)、蜂谷清人(一九五八・一九八一・一九八五)、柳田征司(一九八三・一九九一)、

江口泰生（一九九一・二〇〇二）を中心に取り上げる。

1 『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』（一九六四）、及び『日本国語大辞典』初版・第2版

カツグに関する早い言及には、文献の口語・俗語を読み解く事例としてカツグが取り上げられた次の短い記述がある。「被る・潜る」の意（以下「被・潜」）のカツグがおそらく室町頃には濁音の位置を後退させたカツグ形を獲得し、近世初期には俗語とし広がっていたと推定している。

○『カツグ』の別形も、すでに室町時代になった《日葡辞書》を通じてほぼ推定できる。（略）江戸初期になれば、『かつく（被）』を「カツグ」とする文献上の例は少なくなる。（『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』一九六四、平凡社）

これは後掲の蜂谷（一九八五）でも引かれるが、濁点の明らかなカツグの近世中期以降の文献例は実際には一二挙がっているに留まる。近世前期の濁点の明らかなカツグの文献例は、その後の研究でも、『雑兵』以外ではまだ多くを指摘されていない。

上で言及されている『日葡辞書』（邦訳）では、次のように、「被る」の意の「本来の正しい語は」としてカツクが挙げてあり、室町末期のカツグのグ形はまだ口語的・俗語的であったことがわかる（以下、二語形を対比的に示す場合は各々グ形・ツ形と記す）。

○ Catzugi, gu, uida. カツギ、グ、イダ（被^ぎぐ、い^だ）頭にかゝる。本来の正しい語は、Cazuzugi, qu（被^ぎく）である。（『邦訳日葡辞書』）

このような用例もあるため、カツグ（担）は、カヅク（被・潜）との関連も考えられてきている。^{（注2）} そのカヅクがまず濁音位置を変化させ（中古末期、後述）、次いで肩に物を受ける類似の動作として《担ぐ》に意味変化した（四章で触

れる」と解釈することができる。

ところで、グ形(被・潜)に変化した時期を最初に指摘したのは、おそらく『日本国語大辞典』初版であろう。「か
ずく(被)」の項の「発音」欄に「上代は「かづく」平安末頃から「かつぐ」とも。」とある。典拠資料は示されてい
ないものの、同辞典の資料から推して「古今集声点本」と推定できる。「かずく(潜)」の初版の方にはこの注記はなく2
版で加わる。後述の江口(一九九二)では、この記述を受けるのであろう、「古今集声点本」での関連語彙の清濁事例
が初めて精査され、具体例と共に報告されている。

その後の『日本国語大辞典』第2版(以下、『日国2』)では「古今集声点本」の清濁について、次のようにさらに詳
しい記述が見られる(おそらく江口氏によるか)。

○「かずく(被)」の項「語誌」古今集声点本では「カツク」「カツグ」両形がみられるが、中世末期には、「日
葡辞書」の記述のように「カツク」が規範的な語形と考えられたようである。(後略)

○「かずく(潜)」の項「語誌」(1)上代においては、第二拍濁音形「かづく」のみ用例があり、古今集声点本
等では「カツク」「カツグ」両形がみえる。(2)「カツク」「カツグ」は、肩によって物を負うという意味の用法
が東日本を中心に分布するが、これは中央語では用いられなかったか、極めて勢力の弱いものであったと思われ
る。(略)発音 ア史 上代は「かづく」平安末頃から「かつぐ」とも。」

『日国』初版・『日国2』(江口一九九二)などからは、①カツグ(被・潜)のグ形は平安末期まで溯ること、②カッ
グ(担)は中央語(西日本畿内)でも「極めて勢力が弱い」ものの使用された可能性があると考えられていること、な
どがわかる。【上代カツク(被)↓中古末カツク・カツグ(被)↓中世末カツク(規範的)・カツグ(被・口語的)】

金田氏は、『LAJ』と『雑兵』を対照させて次のようにまとめている。

『雑兵物語』の用例を右の五つの意味分類に照らして整理すると、(引用注)次のA B C D EはLAJ 64・65・66・67・68の各図に対応する)

(A) ウブフ、または、オウ (B) セオウ

(C) カツグ、または、カタゲル (D) (E) ニナウ

となる。用例数各一例のウブフ・オウ・カタゲルを除いた三語を現代の東西方言に行われているものと照合すると、

(1) B Cでは今日の東日本の用法に相似するが、D Eは西日本的である。

(2) 今日の東日本ではC D Eの三つの意味分野を区別しないが、本書ではCとD Eの二つを区別している。

として、東日本的でない特徴二点を指摘された。しかし、その位置付けについては、

これが当時の東国語における意味分担を示しているものなのか、あるいは、筆者の言語環境によるものなのかを確認する必要がある。いずれにせよ(中略)この当時の東西両方言において(中略)詳細な検討が必要である。

として課題とされた。金田氏の分析の問題点として、次の点が挙げられる。

- ① セオウが「人」に使われている三例が挙げられていない。(セオウは「箱・袋状のものを背中に密着させて運ぶ動作を表す」とあり、人間の用例がない。)反対に、(A) (人を背に)のオウ(1例)は、馬に負わせた箱(箱)の例(B)である。

- ② C カツグは「東日本語の用法に相似する」とのみあるだけで、「西日本」にもあることが考慮されていない。

- ①で人間の用例を除外された理由は未詳である。あるいは「その動作を表す語ごとに運ぶものを整理してみると次

のようである。「(もの)に圈点あり」とあり、整理の段階で物に限定したため見落とされたものであろうか(二方ウフは人間でも挙げている)。

②の点は、ひとり金田氏の解釈の問題ではなく、これまでの解釈の陥穽である。これまでの「I」を東西で対比的にとらえる時、一般にカツグは東日本への偏在から東の語形として扱われてきた。しかし、カツグは西日本にも分布する。その西日本の分布をどのように見るかは、近代以前の文献資料での用例を東西いずれの用法が投影したか判断する場合に重要な意味をもってくる。もし、室町や近世初期に西でも使用された語形であったならば、東西差の大局的「傾向」のみを根拠に、「東」のものと一面的に処理してしまうのは不適切となる。I」の言語地理学的解釈(カツグが西で周囲分布をなす点)と中世・近世の文献例からは、近世上方でもカツグが使用されていたと解釈できる。それゆえ、『雑兵』のカツグは東日本特有の用例とは限定できない。(この問題は地図の解釈も含め、続稿にて詳述してきた。)

3 蜂谷清人(一九五八・一九八一・一九八五)

蜂谷氏は、蜂谷(一九五八)では『雑兵』の使用語の概略を紹介し、蜂谷(一九八二)では主に中世資料の当該語彙を考察された。また、蜂谷(一九八五)は各語の中世から近世にかけての使用実態を多くの例によって明らかにされた。カツグが担ぐ意で使われた動詞としての最古例(『幸若舞曲』「文禄本舞の本」文禄二(一一五九三))を指摘された(三章参照)。以下蜂谷(一九八五)を中心に問題点を確認する。

(ア) 「セオフ」の中央での用法の偏り

- ① セオフはオフをもとに「いり日^セを^ナせ^フな^カに^負う」『宇治拾遺物語』等の表現から成立したとする。(傍線引用者)

以下同じ。江口一九九一はセオフの誕生を東国と見る。

② セオフの次のような例を指摘している。『寛一本平家』(糧料を)(屋代本、竹柏園本その他、延慶本・長門本)、『日葡辞書』『天正本狂言』(茶くり、木、ほか1例)、『虎明本狂言』(壺、袋)、『合類節用集』(二六八〇)、『三才全書』『誹林節用集』(二七〇〇)『書言字考節用集』(二七一七)、『続猿蓑集』(二六九八)、『菅原伝授手習鑑』(二七四六、多少あるのみで数は未詳)

セオフで注意されるのは、(明確な言及はないが)実は一七世紀末期まで中央(西)のセオウには「人」を動作の対象として使われた確実な例がまだない点である。中央語としてのセオフの「人」の確例は、後述の坂梨(一九八七)が挙げる一六九八年の例が最初となる。(後述の江口一九九一・二〇〇二が補充された、東国出身の日蓮遺文や東国資料の『梅津政景日記』(これらも「物」を含めても同様である。問題とする『雑兵』を除く。)

つまり、セオフは中世以前の確実な「中央語」の例としては、現在平家物語の諸本のみ、それ以外は室町末期(日葡辞書)以降となり、しかも、中央語としては近世中期頃まで「物」に限られていたらしいということになる。その点で、江口氏の次の記述にはやや疑問が残る。

○ 江口(二〇〇二)「しかし何よりも重要な事は、譲って(引用注：セオウが中央で)盛んに使われることがあったとしても、セオウが人々物による区別に関与しなかったという事実である。中央語では『背中で支える表現』は上代から中世末期まで一貫して、対象によって動詞を使い分けることはなかった。」(傍線引用者、一九九一も同様)セオフは、「人―物」の区別が本来なかったという解釈である。しかし、東国資料とされている『雑兵』の人の例を除外すると、日蓮も含め一六九八年までの中央の例には物に偏るといふ区別が認められるから、現時点ではそれまでは区別をもっていたことになる。^(注3)セオフの人の例については、今後文献例を注意していく必要がある。

(イ) 「セオフ」の近世初期上方での使用状況

『雑兵』と同時期の上方でのセオフの使用状況を確認しておきたい。東国語の影響や表現効果を指摘される『平家』(江口一九九一)や東国資料と目される『天正本狂言』をひとまず別にすると、確実な使用例としては寛永十九年(一六四二)書写の『虎明本狂言』の二例がある。蜂谷(一九八五)では、オフの使用が一般な中で、この二例は注記と節がかりでの例でありセリフには見られないことから、「虎明本の書写時においてはまだ新しい俗語としての感じが強」かったため虎明は使い分けたと解された。一方『日葡辞書』の例に対しては、同じ蜂谷(一九八五)で「少なくとも【補・ト】もこの時期には話しことばとして普通に用いられるようになっていたことを知る。」(共に傍線引用者)とも述べ、多少相違がある。いずれにせよ、口語的俗語段階にあったとしても、『日葡辞書』に掲載される程度には広がっていたと解釈され、十七世紀後半の『雑兵』の頃までには、上掲の節用集類に掲載される程度着していたと解釈できる。このことは、「譬え『雑兵』の原作者が上方出身だったとしてもセオフを使用した」ということを意味する。この上方のセオフの状況からは、『雑兵』のセオフの語形のみをもって、それが東国語としての使用例であると限定できないことになる。近世初期の東西でのセオフ使用は、東西対立の陰でこれまで看過されてきている点である。

(ウ) 問題点

次に、特に『雑兵』語彙の解釈に関わる問題点と課題を挙げておく。^(注4)

① 『雑兵』のニナフとカツグに、(TAJ)66図と67・68図の区別と同様に)明瞭な区別があることを指摘し、この『雑兵』を根拠に、東日本でカツグ一語体系になって区別しなくなるのは、その後の近世後期以降とする。しかし、『雑兵』の用法に東国と異なる傾向があるから(金田氏も指摘)、『雑兵』を基準に東国の状態を考えるためには、まだ『雑兵』それ自体の検討が必要な段階と思われる。

② カタグとカツグとの前後関係と二語の交渉について、担ぐのカツグの誕生に、カタグ（カタゲル）の影響を考慮されている。カタグの現時点での最古例は一五六三年の『玉塵抄』(『日国2』)であるが、一方のカツグの語源と考えられるカヅクが担ぐの意を獲得するのは、後述する十五世紀前期の『三國伝記』まで溯る(従来の説は一四七七年『史記桃源抄』「棒カヅキ」。これらによればむしろカヅク(担)・カツグ(被)の誕生が先で、カタグはその影響で「肩」の意識を元に後に誕生した可能性が高い。^(注5)カタグとカツグの交渉も見直す必要がある。

4 坂梨隆三(一九八七)

『雑兵』に直接関わる次の一点のみ触れる。坂梨(一九八七)での重要な用例は、特にその点には注意が払われていないが、セオウが中央(西)で「人」に使用された最も古い「当流小栗判官」一六九八年の例が挙げられている点である。

○ 恋のおもにの我つまを、せななきつとせおふて、人め思へば、こゑたてぬ(当流小栗判官、二、『近松全集』五、三二五頁、元禄十一、「妻」)

これ以前の人の例は、現在のところ東国を含めても『雑兵』以外には報告されていない。右例は、十七世紀末期には上方でも人に使用されるセオフが現れるようになっていたことを示す点で貴重である。ただし、時代物であるので、当時の上方の口頭語を投影しているというより、あくまで文章語的表現に留まった用法と見るべきかもしれない。坂梨(一九八七)でも、このセオウの文体に注意を向け、近松世話浄瑠璃に一例もない(蜂谷一九八五を受ける)にも関わらず時代浄瑠璃にあることと、近世初期には辞書に偏ることから、「上方においては当時の口頭語というよりむしろ書記言語としてふさわしいものであったものかと思われる。」とされている。この点は、先に3(イ)蜂谷で見た口語俗語的性格と一見矛盾するようにも見える。あるいは、「物」への例は口語として既に広がっていたが、「人」への

使用は何らかの影響（東国語か区別のないオフの影響？）で生じたばかりの特殊なものだったということを示すのかもしれない。

方言分布を確認すると、「A」の65図「ショウ（包みを背負う）」では、セオウが近畿地方に周圍的に分布するので、「物」の用法としては、ある時期関西（上方）でも口頭語として拡大した様相を示す。しかし、人を対象とする64図「おんぶする」では、そのような広がりを示す西のセオウはない（セオウ五地点とショウ二地点が四国・九州も含め散在するのみ）。つまり、方言の西のセオウも、一般的に人に使用された痕跡は極めて乏しく、文献例の偏りと傾向を同じくしている（近世後期以降は人へのセオウも徐々に見られるようになるが、そのせいか東では岩手北部と、関東周辺に教地点の周圍的分布がある）。その点で、右の「人」の例は、上方での例として極めて珍しいものであり、「人」の例はそれだけ文章語的な性格が強い用例と言えよう。

5 柳田征司（一九八三・一九九一）

柳田征司（一九九一、初出は一九八三）は、「担ぐ」語彙に限定して文献例を分析している。特に、カヅクが担ぐの意として使用された一四七七年桃源瑞仙の『史記抄』の複合名詞「棒カヅキ」は西の古い例として重要である。瓊末な点であるが、問題点・課題としては以下の点が指摘できよう。

① ニナフが、肩で直接担ぐ場合にも用いられる例として『雑兵』の次の例を挙げる。

後生一大事に大鳥毛の鞘・二かひ鳥毛の鞘をになつた鍔担も有。

しかし、この例は、蜂谷（一九八五）で「一人でかついだ棒の先端に鞘をさげたと、あるいは自分の背中に背負ったもとれるので、その具体的状態が必ずしも明らかでないものもまじる。」としている例である。蜂谷氏の解釈のほか、二つの鞘を棒の両端に下げ棒を天秤棒のように肩に乗せた（ニナツタ）とも解釈できるし、はたまた、紐で

つないで肩から前後にかけたとも考えられるところであり、確例とはしがたいであろう。

② 『物類称呼』の次の例の割注について、「江戸のことばについての説明と見ると」との仮定ではあるが、江戸でもニナフとカツグの使い分けがあったとする。

畿内にて○たご担桶といふを江戸にて○になひといふ（以下、割注）これになひをけの略也又になふとハ、人ふたりにてもつを云かつくと云ヒかたぐると云ハ意違へり（巻四）

しかし、割注は、上方語形のカタグルも同時に載せているのであるから、一方のニナフのみを江戸語の説明であるとは断言できない。また、この「江戸にて○ニナヒ」はあくまで名詞の例——しかもニナヒオケという物の名の省略形——であるから、江戸で、動詞ニナフが使われたかどうかは別に確認が必要であろう。

柳田（一九九二）が挙げるように、十九世紀に入ると『浮世風呂』で確かに近世後期江戸での使用は確認できる。

しかし、『浮世風呂』の二例のニナフの担ぎ方は、柳田氏も「明らかでない」とされているように不明である。地の文には西日本のカタグルも一例あって、東西の語彙が混在しているようにも見える（その点で、ニナフも文章語としての混在が疑われる）。また、ニナフの名詞の例として挙げる『浮世風呂』の例——「水ぎれの時にも担桶で水をかつかげますが、さつくと気味のよい人でございませすネ（三編上）」——は、動作の表現ではカツグで表されているから、このニナヒオケは、『物類称呼』のニナヒ・ニナヒオケと同様で、ニナフの確例というより物の名として（西の語形が？）定着した可能性が疑われる。（ニナフは、江戸でも使用されるようになっていても、あるいは、あくまで文章語的性格をもった語であったか。）

後の『皇都午睡』（二八五〇）では大阪と江戸を対照させて、「荷なまふをかつか、背負ふて行をしょって行」（巻三上、峰谷一九八五指摘）とあり、『浮世風呂』より後になっても西ニナフ—東カツグとしている（後代により対比的になったと見る余地もある）。

さて、このように検討していくと、近世後期の『浮世風呂』はとりあえず保留するとしても、問題としている『雑兵』をひとまず除外すると、近世中期以前で、「になふ」が確実に東国語として使用された用例（日蓮は除外される）は、江口（一九九二）が挙げる唯一次の『梅津政景日記』の一例のみになる。

○ はな太郎右衛門……もり岡まで被遣候へ、死候由、からたをにない参候（元和五年（一六一九）十二月三日）

江口（二〇〇二）のように、死体を「何らかの器具（棺桶）で運ぶ動作」と解するなら、二人で棺桶を棒で担ぐ動作となる。報告されているセオウ（シユオイ）九例、カツク一二例に比して稀な使用で、桶でなく「からだを」ニナフという表現も何か練れていない感が残る。

因みに、『LAF』を見ておくと、東ではニナフはわずかに散在するにすぎない。『LAF』66（材木）では併用回答一地点（東京）、67（天秤棒）では、単独回答一地点（仙台）と併用回答一地点（東京66図と同じ地点）、68（二人で）では、単独回答一地点（神奈川三浦半島）と併用回答一地点（群馬）である。これらの分布のみでは、後代（近世後期や共通語など）の影響か、近世前期以前の古い用法を留めるのかは判断し難い分布である。

ところが、このように東国での使用が疑問視しされるか限定されるニナフが、『雑兵』には七例も現れる。東のニナフの近世での使用がどのようなものであったか（時期や文体・位相）、『雑兵』以外にさらに詳しい調査が必要と考える。

6 江口泰生（一九九二・二〇〇二）

江口（一九九二・二〇〇二）は、当該語彙を文献と方言との対照によって解釈した、最もまとまった最新の研究である。総合的解釈としてもっとも詳密であるだけでなく、特に東西における「人―物」の使い分けの相違を指摘し、意味論的問題や東西方言の語彙体系の歴史的相違、さらに基層語の問題を提示している点でも重要である。江口（一九

九二)を發展させた江口(二〇〇二)は、文献資料を補充し、特に東西の語彙体系の問題などを特に發展させたものであるが、基本的に江口(一九九二)を踏襲しているので、以下では行論のままとまっている江口(一九九二)を中心としつつ、江口(二〇〇二)での加筆部分を補うかたちで取り上げる。

(ア) 中央(西)のカツグの文献例の確認

カツグが中央(西)である程度用いられていたことを認めているが、この点は『雑兵』のカツグが西の語形の投影でもあり得る余地を検討する上で、実は重要である。

「カツグ／カツグが『担ぐ』意で中心に行われたのは東日本であったのではなからうか。」(しかし、中央でも)「時折カツグ／カツグで『担ぐ』意で用いられても文献に偏りがありません、中心はカタグ・ニナウ・カクであった事になる。」(傍線引用者)

カツグすべてを東国語とは断定しておらず、「文献に偏りがあり」ながらも中央でも「中心的でない」が「時折」用いられたと位置付けている点は注意しておきたい。中央でも使用されたという解釈は、後述するように、中世の西の口頭語を投影すると見られる『三国伝記』のカツグ(滑濁未詳)の新用例と矛盾なくつながるからである。

(イ) 中央(西)のセオフの文献例の確認

『雑兵』のセオフの解釈にとって重要となる、セオフが、近世以降中央(西)で使用された点を確認しておきたい。諸例の検討の後、次のように述べる。

(中世までの例は)「このように中央語の文献のセオウは、表現効果・東国語の介入・東国語の影響などによると思われ、これを除けば中央語では中世末期にセオウはさほど勢力を有しなかったらしい。そして何よりも重要な事は、

譲って中央語の俗語・口頭語の中で盛んに行われたとしても、セオウが人か物かによる区別に関与しなかったという事実である。」(江口二〇〇二、傍線引用者)

中央のセオフが、仮にはじめは東國の影響だったとしても、「中世末期にセオウはさほど勢力を有しなかった」が確かに使用され(『日葡』)、「中央語の俗語・口頭語の中で盛んに行われた」可能性もあり得るといふ解釈である(『日国2』も同じ)。セオフの使用状況は3の蜂谷氏のところでも確認したが、江口氏の解釈でも、『雑兵』よりも前の時期に、中央(西)でもセオフが使用されていたことになる。

LAJ「しょう(包みを)」を見ると、西日本のセオウはセトラウの周囲に周圍的に分布している。これは、セオウがある程度古さをもって西日本でも拡大した時期があったと解釈できる。これは先の3(イ)とも江口氏の上記解釈とも一致するものである。

(ウ) 問題点

① 「カツグ」の西日本方言分布の解釈

江口(一九九二)では、西日本のカツグの分布を、次の理由で新しい分布とする。

「また現代西日本の一部にカツグが報告されるが、『島根』新しい言い方か【徳島】共通語的なカツグ……」(『全国方言基礎語彙の研究序説』)などのように新しい分布らしい。カツグが『担ぐ』意を有するのは山口県であるが、隣接地域と同様に比較的新しい時代に広がったものではあるまいか。」

しかし、『全国方言基礎語彙の研究序説』では、島根・徳島について歴史的な新旧や共通語として分布かどうかを厳密に考証しての言及ではない(「新しい言い方か」「共通語的」のみの言及)。徳島は京阪地域にも近いこともあり新しく共通語を受け入れた可能性も考慮されるが、島根は古い方言をよく留める傾向が指摘され、徳島と同列に扱うこと

は躊躇される。さらに遠方の山口を、島根同様に新しい分布と見なすのは無理があるのではなからうか。また、LAVをよく見ると、山口だけでなくさらに広島や四国西部など一帯に広く分布している。文献でカツグが中央(西)では稀であったという先入観が、独立して検討すべき言語地理学的解釈に強く投影しているようにも思われる。文献と方言地図それぞれの解釈とその結果の対照作業においては、一方の資料での結論が他方の解釈を歪めないように注意して一旦それぞれの解釈を独立して行ってから、改めて一致点・矛盾点を考察するのが理想的であろう。これらの分布はむしろ西での周囲的残存と解釈されるのではないだろうか。

② 「セオフ」における「人―物」の区別の有無

セオフが「人―物」区別に不関与という江口(一九九一・二〇〇二)の解釈の問題は、3・4で取り上げた。

7 先行研究の課題

以上、『雑兵』に焦点を当てつつ、当該語彙の残された問題点を見てきた。先行研究各々での進展を確認するため発表順に取り上げた。語形単位では扱わなかったのでやや煩瑣な行論となってしまったが、課題を簡潔書きにまとめると、以下のようなことになる。

① 『雑兵』の「背負う・担ぐ」語彙の用例の確認と考察が不十分——特にセオフ・カツグの用例の確認とその位置付けが十分でない。これは、「東国資料」という先入観があるためではないだろうか。

② 各語の意味・用法とその年代の確認——特にセオフ・ニナフ・カツグについては、意味・用法、年代、地域差についてなお検討の余地があることが明らかとなった。

a、セオウ・カツグは、中央(西)でも近世初期には使用されていたと解釈できる。

b、セオウの初期の例は「物」に限定される傾向がある。(人に使用された例は、一六九八年以前には『雑兵』のみにな

るか。

c. ニナウは、近世前半に東日本『雑兵』以外で使用された例がかなり乏しい。

③ カツグ・セオウ（シヨウ）を「A」によって東日本語形とのみ限定的に解釈している問題——言語地図の検討は本稿の目的ではなかったが（別稿予定）、東の語形と限定されてきたカツグ・セオウの西日本の周囲的分布の解釈には、再検討の余地がある。

これらの問題点を踏まえ、資料と用例の解釈を、今後改めてし直していく必要があろう。

三 カツグ（担）の意の最古例

二章まで先行研究の課題を明らかにする作業に紙幅を費やした。以下、簡略に担ぐの意の動詞カツクの最古例を追加し、『雑兵』の当該語彙の問題を指摘しておく。

まず、一四〇七〜四六年頃成立の『三国伝記』に、担ぐ意を獲得したカツク（清濁不明）の古い例が指摘できる。

肩に弓（握^アリ太の弓）を担ぐ格好である。

○ 「ワニ足ニ歩ミナシ小節巻ノ弓ノ拳太ナルヲ肩ニカツキ、塗^ヌウツホノ」〔『三国伝記』卷四・二一話、古典資料、一九六九、すみや書房より。日国2版でも採録〕

これまでの古例『史記桃源抄』一四七七年より約半世紀溯る。江口（二〇〇二）はカツグの成立は東国と考えられたが、『三国伝記』の作者・玄棟は近江出身である『史記抄』著者・桃源瑞仙も近江出身。伝本はいずれも近世であるので後代の混入の可能性が皆無ではないが、この用例は統稿にて詳しく検討してみたい。^{（注5）}

四 『雑兵』の「背負う・担ぐ」語彙の体系

次に、これまで長く微細に先行研究での課題を取り上げてきた目的を示すために、『雑兵』の当該語彙の概要のみ提示しておきたい（具体例と詳しい解説は続稿に譲る）。

LAJ5図に併せて分類し、運搬の対象物ごとに用例数（カッコ内）を示したのが次図である。（なお、用例は弘化三年本を底本とし、内閣本も比較参照した。両者の相違点は本稿第二章でも一部触れたが、特に問題となる大きな相違はない。）

語形の東西での使用位置は本稿での検討結果を反映させた。即ち、セオフ・カツグは近世初期に東西いずれでも使われたと解釈できる語形であり、ニナフも東での使用の可能性も残った。その解釈に基づくこの図を見ると明らかのように、東日本特有語と限定できるのは「ウブウ」一例のみである。むしろ西日本特有語形である「オウ一例・カタゲル一例」の方が多い。また、東西両方で共通して使われている語形が選ばれ多用されているようにも見える。そしてなによりも、その一例ずつしかない「例外的」三語形を除くと、「人―物」を区別せず一語形（セオフ）で表現するという「背負う」語彙の「一語体系」は、西日本の「オフ一語体系」と同じとなる（東は「人―物」の「二語体系」）。かつ、肩に「直接的に担ぐ―間接的に棒などで担ぐ」（66―67・68）を二語（カツグ―ニナフ）で区別するという「二語体系」もやはり、西日本の「二語体系」と同じである（東は「カツグ一語体系」ことが明らかとなる）。

つまり、「語形」単位でなく「語彙体系」単位で見ると、LAJの近代方言と対照する限りでは、『雑兵』は「西日本の語彙体系」と見なせることになる（例外はウブフ一例のみ）。「一見東西語形が混在しているように見えるが、『語彙体系』としては一地方（西）の体系である」（例外一例）とはどういうことを意味するであろうか。続稿にて考えていきたい。

『雑兵物語』における「背負う・担ぐ」語彙

L A J No		対象物	東の語形	西の語形
64	おんぶする	人	●ウブウ (1) 25%	
65	しょう (袋物)	人 沓袋・袋 鍔の鞘 行李 箱 引肌物と箱 幕 俵 屏風 (セオイ物 (箱か))	セオウ (3) セオウ (2) セオウ (2) セオウ (6) セオウ (1) セオウ (1) セオウ (1) セオウ (1) セオウ (2)	▲オウ (1)
66	肩で	鉄砲 沓籠 鍔 弓と替矢 旗 不明 (人力) (鍔カツギ)	カツグ (6) カツグ (2) カツグ (2) カツグ (2) カツグ (1) カツグ (1) カツグ (13)	▲カタゲル (1)
67	天秤棒で	鍔の鞘 箱	(?) (?)	▲ニナウ (1) ▲ニナウ (4) ▲ニナウ (2)
68	二人で	箱	(?)	▲ニナウ (2)

語形の上の●は東日本的語形、▲は西日本的語形、無印は東西両方で使用された語形。

五 本稿のむすびとして

『雑兵』には、「背負う・担ぐ」語意以外でも東と西の語彙が混在しており、東西二つの語彙の源をもつという「多元性」を示す。その二つの語彙は、不規則な混在というより、四で見たように何らかの傾向をもって重なっているように思われる。性質の異なる複数の語彙の重なり、即ち「語彙の重層性」には何らかの傾向性・法則性が隠されているようである。それはおそらく『雑兵』という資料の何らかの性質を投影する特性と考えられる。三の古例によって、カック担の語源・時期・用法の再検討が必要になった。四で示した『雑兵』の当該語彙は、従来の「東国資料」という扱いに再検討が必要であることを示唆する。[A]で西にも分布するセオウ・カックも改めて見直す必要があるであろうである。いまだなお多くの課題を提供する語彙であるが、それらの詳細な検討は機会を改めたい。

注

- (1) それら七図は、64・65・66・67・68図と、294図「片方の肩で包みを担ぐ」、295図「かつぐ(担ぐ)」―第66・67・68図の「総合図」である。先行研究で主に対象とされるのは前者五枚であり、本研究でもこの五枚を中心に取り上げる。
- (2) 後述するように、語源として有力視されているカタグよりもカック(担) (清濁未詳) の例の方が一五〇年程古いのである。辞書では一般にカタグの方を語源とする。『小学館古語大辞典』「かつぐ(被)」の「語誌」には『かつぐ』は『肩ぐ』からの転といわれ(中略)とあり、『被(かつ)ぐ』が少なからぬ影響を与えたと思われる。という程度のものである。『日国2』の「かつぐ(担)」の「語誌」の参照先の「かずく(被)」でも、カック・カック(被)の語形上のゆれのことしか言及がなく意味的派生関係の説明は一切ない。カックの語源欄は「①カタグの転・②カック(肩付)・③肩の転」のみである。辞書ではまだカック(被)からの意味的派生が語源であるという解釈は示されていない段階と言える。

注5参照。

(3) もっとも、中世以前の唯一かつ孤例の平家に関しては、江口氏は、「中央の文献のセオウは、表現効果・東国語の介入・東国語の影響による」(江口一九九二)ことを重視しているので中央の例でないものとして除外すると、上代から中世末期までセオフの中央の例は日蓮のみとなる。日蓮も東国出身として除くと中央語としてのセオフの例は皆無で、「背負う」語彙はオフ一語形となる。オフ一語形のみのこととして言えば「中央語では『背負う』表現は上代から中世末期まで一貫して、一つの纏まりをなしていた」(江口一九九二)と言うことはできる。しかし、中央語としてまだ存在していないセオフは、区別の有無そのものの問題にもとより無関係の段階となる。なにより、上記の文脈は中世での使用を認めた上で、それでもセオフはやはり本来「人―物」両方に使用されたと解しているところであるから、疑問点は残る。

精密な分析を認める江口氏のこの誤認の理由は不明である。あるいは、江口氏が西日本出身のため、無意識のうちにオウ・カルー同様「背負う」表現に「人―物」の区別のない西日本方言意識が先入観となったということか(安部は東日本出身)。

(4) 用例数に関する問題二点。①「負ふ」九例(「負おす」の一例を含む)とあるが、典拠と見られる内閣本(金田索引)では「負う」五例、複合動詞「手負う」四例、「負おす」一例で合計一〇例であった(その他「追ふ」三例あり)。なお、「負おす」の例のない弘化三年本(深井索引)では「負ふ」六例、「手負う」四例で同じく合計一〇例(「追ふ」三例あり)。(なお、いずれも名詞「手負ひ」(多数あり)などは別にしての数字。)②瓊末な点であるが、「負ふ」のうち一例は「負おす」の形とするが、その内閣文庫本の「負せた」の振り仮名「おゝ」は実際には博物館本の振り仮名によるもので(凡例)内閣本自体にはない。因に、弘化三年本「負せた」である。

(5) カツク(担)が十五世紀前期まで溯るとなると、中古末のカツグ(被)との近さは一層縮まる。次の例は「禄として衣服や布を載いて肩にかける」例であるが、「肩に」を補って読み取れば、後代の担ぐと殆ど同じ動作と見なし得る。「大将も物かつき、忠岑も禄賜りなどしけり」『大和物語』二二五。平安貴族は布を肩に掛けたであろうが、続く時代に武士が(褒賞時に限らず)肩に頂いたものは武士に相応しい物(弓や刀)に変化していった。中古末期には被クもグ形を生んでいた。グ形は、布以外のものを肩に乗せるようになった異なる支配階層の時代の新しい用法にふさわしい新語形でもあったろう。

『大和』のような用法の延長線上へと被(カツ)グが意味を拡大させ得る文化的条件は、存外『三国伝記』よりもかなり以前の時代に、(肩グとは無関係に)既に整っていた、と見ることはできないのだろうか(注2参照)。カタグよりカツクの方が先行したとすると、カツク(被・担)とカツグ(被・担)との混乱をさけて理解しやすいよう「Katabu(肩グ?)」(△Katabu)が、語源俗解として後で作られたという解釈もあり得よう。

このように、カタグ先行語源説をしりぞけ、右のような派生の可能性を総合的に考慮すると、中古末からツ形・グ形の両方が併存していた「被」の意と同様に、「担」でも十五世紀には両語形が併存していた蓋然性は高いと考えられようか。

参考文献(各々先行論文を網羅したと思うが遺漏のご教授を乞いたい。)

◆『雑兵物語』関係

浅川哲也(二〇〇二・三)「内閣文庫本蔵『雑兵物語』写本三種の本文と系統」『国語研究』65)

金田 弘(一九五六・三)「雑兵物語に見られる用言をめぐって」『国学院大学国語研究』4)

————(一九七二)『雑兵物語索引』(桜楓社)

————(一九七二・一一)『雑兵物語』賞書——東国語文献としての性格について——『国学院雑誌』

————(一九八九・三)『雑兵物語』とその諸本』『国学院大学紀要』27)

小林好日(一九四四)「東北方言に於ける助詞『さかい』」『橋本博士還暦記念国語学論集』岩波書店)

斎藤義七郎(一九六八)「雑兵物語の語法・語彙」『近代語研究2』武蔵野書院)

杉浦明平(一九六四・二)「軍学書の記録性——『甲陽軍鑑』と『雑兵物語』——」『文学』32—2)

中村通夫(一九三六・九)「江戸時代初期東国語の一資料——雑兵物語の成立について——」『方言』、『東京語の性格』川田書房、昭二三年一月所収)

中村通夫・湯沢幸吉郎(一九四三)『雑兵物語・おあむ物語』(岩波文庫)

峰谷清人(一九五八・七)「江戸初期東国語の一考察——『雑兵物語』の用言二・三をめぐって——」『文芸研究』29)

深井一郎(一九六六・一二)「雑兵物語の研究」『金沢大学教育学部紀要』15)

—— (一九七三) 『雑兵物語研究と総索引』(武蔵野書院)

道井 登 (一九六三・一〇) 「近世語の研究——雑兵物語について・その一——」『石川県高等学校国語研究会会報』1)

森下喜一 (一九七七・一二) 「雑兵物語と高崎周辺の方言語彙について」(『野州国文学』20)

◆ 「背負う・担ぐ」語彙関係

安部清哉 (一九九三・三三) 「語彙における伝播の中心地と伝播の範囲による方言分布成立過程の解釈の問題」『フェリス女学院

大学文学部紀要』28 (三一) (1) 及び補注 (2) 参照。

江口泰生 (一九九一・一二) 『背負う』の表現」(『国語学』11)

—— (二〇〇二) 『ロシア資料の形態音韻論的研究』(岡山大学文学部研究叢書24)

川本栄一郎 (一九八〇) 「石川・富山両県における「かつぐ」の方言分布とその歴史」(『金沢大学教育学部紀要社会科学人文科学編』第29号)

国立国語研究所編 (一九八二) 『日本語地図』「解説」(大蔵省印刷局)

坂梨隆三 (一九八七・三) 「おんぶする」(東京大学教養学部『人文科学科紀要』85)

佐藤 茂 (一九七四・一二) 「カツグをめぐる——福井県足羽郡美山町の言語調査から——」(『福井大学教育学部紀要第1

部人文科学国語学・国文学・中国学編』第24号)

高田 誠 (一九六八・一一) 『日本語地図』66・67・68図より——言語地理学と意味の構造との関係をさぐる——」(『日本

方言研究会第7回発表原稿集』)

高橋顕志 (一九七七・七) 「カツグ・ニナウ・カクをめぐる」(発表要旨『都立大学方言学会会報』76)

本堂 寛 (一九七六・六) 「語の意味差と地理的分布——「かつぐ」をめぐる——」(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』

桜楓社)

西田隆政 (一九八七・一〇) 「漢文訓読と中古国語——「かうぶる」と「かづく」をめぐる——」(『訓点語と訓点資料』78)

野林正路 (一九八〇・一一) 「意味論の方法序説」(『言語生活』347、当該語彙)

峰谷清人 (一九五八・七) 「江戸初期東国語の一考察——『雑兵物語の用言二・三をめぐる——」(『文芸研究』29)

(一九八一・一一)「中世語彙の概説」(講座日本語の語彙4、明治書院)

(一九八五・一〇)「中近世の文献に見る『背負う』『かつぐ』の類をめぐって」(『国語語彙史の研究六』和泉書院)

平山輝男(一九七九)『全国方言基礎語彙の研究序説』(明治書院)

編(一九八二)『全国方言辞典②県別人体語彙の体系』(角川書店)

柳田征司(一九九二)『カツグ』(担ぐ)と『ニナウ』(担う)。(『室町時代語資料による基本語詞の研究』第八節、武蔵野書院、初出は「かつぐ・かたぐ・になう」『講座日本語の語彙9 語誌1』明治書院、昭和五八)

〔補注1〕 初校時、高橋顕志氏より御論文を御教授いただいた。御礼申し上げます。

高橋顕志(一九七七)「四国諸方言における支持動詞カクについて——語彙による比較方言学の試み——」『都大論究』14

〔補注2〕 「背負う・担ぐ」語彙については、かつて安部(一九九三・三)で部分的に取り上げたことがある。

〔付記1〕 江口(一九九二)の後、氏と私信のやり取りがあり、江口二〇〇二をご恵与いただいた。安部(一九九三)の言及から公表がかくも遅くなったが深謝申し上げます。また、本稿は、次の口頭発表をもととしその三分の一程を整理し直したものである。席上ご教授下さった方々に御礼申し上げます。「背負う・担ぐ」語彙と『雑兵物語』の背景——語彙の多元性・重層性から見た資料——(第118回青葉会とほの会、二〇〇三年二月三日学習院大学)。

〔付記2〕 本稿は、次の科研究費による研究成果の一部である。平成一五—一八年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)(1)「日本語方言形成モデルの構築に関する研究」(課題番号15320055、代表者・小林隆氏(東北大学))。

〔あとがき〕 佐藤喜代治先生には、先生がフェリス女学院大学の客員教授時代の二年間と引き続いで非常勤教員時代を、国語学担当二名としてご縮させていただきます。大学院時代には、ご自宅での「源氏の会」に三、四年ほど参加させていただいた。ご研究や満州時代のお話など、奥様の大きな牡丹餅とともに、生涯忘れることはできない。